【郷土史への扉】

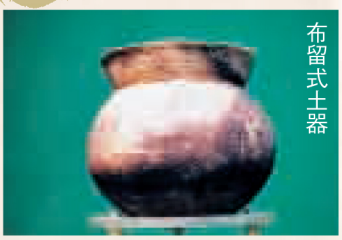
隼人城あれこれ

「隼人城」と言いますと、なかなか聞きなれませんが、城山（城山公園）と言うと、市民の憩いの場として親しまれています。

隼人城

隼人城は、別名を早人城、曽之岩城、国府城、清水新城、国府新城などと呼ばれており、約二万五千年前に火山噴火でできた、姶良カルデラの火口壁の標高一九〇㍍、東西七〇〇㍍、南北九〇〇㍍の溶結凝灰岩の台地上にあります。周囲は三〇㍍以上の絶壁で、まさに天然の要害として、古代から国分地方を代表する山城として使われてきました。

隼人城は、現在城山公園として市民の憩いの場となっていますが、昭和五二・五三年度に公園整備に伴う発掘調査が実施され、縄文時代、古墳時代（五世紀初め）、奈良時代（八世紀初め）、戦国時代（十六世紀の中ごろ）にかけての遺物や遺構が発見されました。


布留式土器

特に、竪穴住居の中から五世紀初めに近畿地方で使われていた「布留式土器」と南九州で使われていた「成川式土器」がともに出土してきたことは、当時すでに近畿地方の人々が隼人城に居た可能性を示しており、これは古事記・日本書紀に書かれている、いわゆる「クマソ征伐」に纏わる伝説にも合致することを現しており、非常に貴重な資料（市指定文化財）となっています。

また、八世紀初めのころといいますと、養老四（七二〇）年に大隅国守であった陽侯史麻呂が殺害され、これが発端となって「隼人の乱」が起こりました。八幡宇佐宮御託宣集に書かれている「隼人七城」のうち、最後まで朝廷側に抵抗して立て籠もった曽之岩城が、遺物の出土状況からみて隼人城であったことを示してます。

さらには、十六世紀の中ごろは大隅国を統治していた国衙の勢力が弱まり、守護代であった本田氏が台頭してきます。さらには本田氏に代わり島津氏が勢力を伸ばしてくる時期であり、軍事的緊張が背景となって隼人城を山城として手を加えたと考えられます。

このように、隼人城は国分地方の歴史的にも重要な時期に「山城」として使われていたことがわかります。

では、なぜ隼人城は幾度となく山城として使われてきたのでしょうか。確かに城としての立地的条件もありますが、山城を構成している地形と地質に要因があると思われます。先にも述べましたように、隼人城は台地のほとんどが溶結凝灰岩であり、その上をシラス（火砕流堆積物）が覆っています。

溶結凝灰岩は姶良カルデラの噴火の過程でシラスが深く積もり、火山の熱とシラスの重さによって再び溶結して岩石になったもので、その成形途中、熱の低下に伴い垂直方向に亀裂ができ、これが原因で垂直剥離の現象を起こします。隼人城の断崖絶壁はこのようにしてできました。また、溶結凝灰岩の上にシラスが載っていることから、雨水がシラスに浸み込み、溶結凝灰岩との境目から湧水として地表に出てきます。（現在でも二か所の湧き水が確認されています）

このように、隼人城は天然の要害と豊富な湧水によって、長い期間の籠城にも耐えうる山城となっています。

ところで、本来「隼人城」という名前があるのに、どうして「城山」と呼ばれているのでしょうか。これは、江戸時代の初め、徳川幕府が薩摩藩に対して堀・石垣・天守閣を持つ城を築くことを許さなかったことが要因となっています。このようなことから、薩摩藩の城は、麓に平屋の「館」を造り、後背の山地に「詰め城」を置くといった形態となりました。

国分では、現在の国分小学校と国分高校の一部に「舞鶴城」が置かれ、後背地の隼人城が詰め城となりました。鹿児島の場合は、現在の黎明館の場所に「鶴丸城」が置かれ、後背地の「上山城」が詰め城となりました。そのため薩摩藩では詰め城のことを一般に「城山」と呼ぶようになりました。

ちなみに、伊集院では、本来は「一宇治城」ですが、城山と呼んでいます。また、財部でも、本来は「龍虎城」ですが、ここでも城山と呼んでいます。このように、現在「城山」と呼ばれている山城は、薩摩藩領内にはたくさんあります。

今回は、隼人城を紹介しましたが、霧島市内にはほかにもたくさんの山城があります。これからも、折に触れて山城について紹介していきたいと思います。

（文責　鈴）

文化振興課からのお知らせ／城山公園内にある国分郷土館は屋根改修のため、8月17日（月）から9月11日（金）まで休館します。